



一般社団法人 日本電気制御機器工業会
副会長

藤田 俊弘

【下山の思想を読んで】

最近、五木寛之さんの「下山の思想」を読みました。日本経済新聞の2012年2月10日の経済観測欄のところで、早稲田大学の深川由紀子教授の書評が目に入り、気になったからです。五木さんの視点らしく、色々と例示的に描かれていましたが、私が受け取ったメッセージは、概ね以下の通りです。

「山を登る登山に対して、山を下りるという意味での下山である。登山は山の頂上をめざすことであるが、めざす山頂に達すると、次は下りなければならない、頂上の至福の時間には永遠にとどまっておられない。下山の途中で、登山者は登山の努力と苦勞を再評価し、下界を眺める余裕も生まれ、自分の一生を郷愁を持ってあれこれ思う余裕がでてくる。未曾有(みぞう)の大災害に見舞われ、再生の目標をどこに置くのか、それは山頂ではなく、再び経済大国を目指すのではなく、実り多い成熟した下山の道を歩むべきなのではないか、……」

こういった内容と感じました。もちろん「下山」はあきらめの行動ではなく、新たな山頂に登るプロセスである、とされながらも、私はこの本を読んで、部分的にはなるほどそうかと思えるところもあったのですが、読後感として、やはり全体を貫く思想に対しては、肯定的に思えることはありませんでした。思想ですから、どう考えようと自由といえば自由なわけですが、この思想を個人の問題ではなく、国家として適用することは決して受け入れられない、若者の立場に立てば全く許容できない、と感じました。

【転換点での進み方を歴史に学ぶ】

私が何事をする場合にも、進むべきなのか、やめるべきなのか、どうすればいいのかを考える際に、いつも思い出す歴史の一場面があります。今のように先行き不透明の時代には、やはり歴史に学ぶ、ということも有益かと思われます。ちょうど20年ほど前に、科学朝日に理系向けの歴史が連載されていて興味深く読んでいたのですが、それが一冊の書籍にまとめられており、今回はその内容を紹介させて頂こうと思います。その本は、朝日新聞社から出版された「日本史再発見：理系の視点から」で、著者は国立教育研究所物理教育研究室長であられた板倉聖宣先生です。今回ここでご紹介することを、朝日新聞社並びに板倉先生のご了解を得ましたので、一部のエッセンスをまとめてみたいと思います。

板倉先生の素晴らしいところは、通常の歴史書は文化系的記述のみで、数量的な事柄にあまり注意が払われていないのに対して、徹底的に古い文献等から統計数字を調べ上げ、そこから事実を引き出すという分析手法にあり、理系出身者として大いに共感できる点があります。ここでは、江戸時代の

相馬藩(福島県の東北で海岸沿いの相馬市に城を構えていた)の状況について、学んでいくことにします。相馬藩ではなんと、江戸時代、1656年から廃藩置県が行われる1871年までの215年間の年貢収納量等のデータが貴重な資料として残っていたそうです。

図1では、まず1720年までの64年間のデータをグラフにして紹介します。図から明らかなように、検地高も年貢の収納量(出来高)もほぼ順調に増大しており、検地高は1590年の4.9万石、1593年の6.0万石から1698年の13.6万石まで増大し、1593年を起点として計算しても、1698年までの105年間に2.25倍に増大し、年率では、1639年までの46年間で0.95%、それ以降の59年間で0.64%で、全体を平均すると0.79%となっています。年貢収納量は、天候の影響等により増減の変動を繰り返しながらも、全体的な傾向としては、着実に増え続けており、1720年までに限る限り、相馬藩は大変な高成長ぶりを示していました。

【相馬藩の高度成長を支えたもの】

このような高成長は、主として新田開発によって実現されたものであり、田畑が増えて石高が増えれば、それだけ領主＝藩の収入も増えることになり、江戸時代の前期には、どの

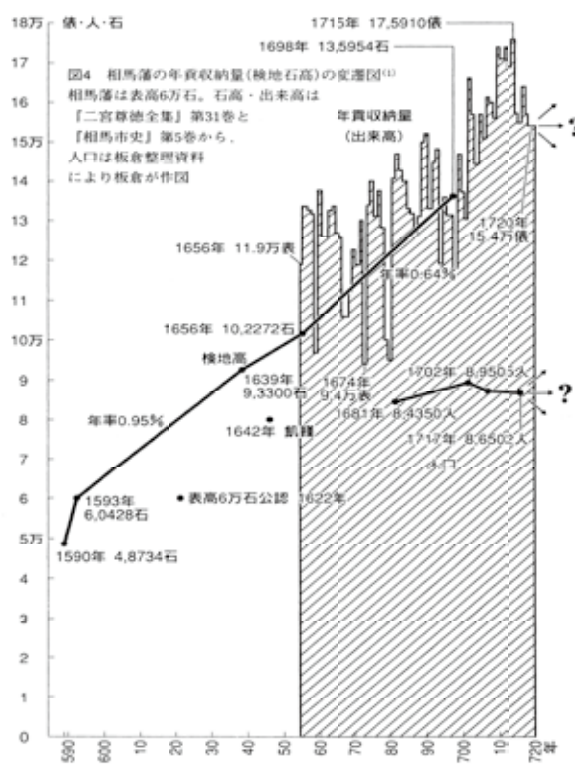


図1. 相馬藩の江戸時代前半の収穫・年貢・人口等の状況

藩でも新田開発に力を入れて取り組んでいたようです。新田が増えれば、その田畑を耕す百姓も石高の成長と共にかなり増大したはずですが、その人口は図に示すように1702(元禄15)年までは増えているものの、それから少し減っているようで、その後の成長への危険の兆候ともいえ、八代将軍吉宗は、このような人口の減少を気にして人口調査を6年ごとに行ったとのことでした。

さて、ここで板倉先生は問いかけます。1720年以後、この藩の年貢収納量や人口等はどのように変化することになったのでしょうか。横這いか、増大か、それとも減少か。そして、それは何によるのでしょうか？

【予想の仕方】

日本人の多くは、本来「原則的」には「経済は発展するもの」と考えていると思います。とりわけ図1に示したような高度成長の状況からすれば、「江戸時代の経済だって少しは成長を続けているはずだ」と考えるのが自然でしょう。そういう常識からすると、「相馬藩の年貢収入だって、時間とともに少しは伸びて当たり前」ということになるでしょうから、問題は、①それまでの急成長を維持できるか、それとも②「安定成長期」を迎えて低成長しかしなくなったかの違いだけである、とも思われるわけです。

一方で、「それは資本主義社会での話だ。そんな常識を江戸時代にまで当てはめるのはおかしい」や「江戸時代というのは停滞社会だ」、また「明治以後とはまったく違う」とも考えることもできます。

ただ、1720年までの相馬藩の年貢収入はかなりの高成長を続けていたので「相馬藩の経済は、その後成長が鈍化したとしても、やはり成長している」と考えるのが常識的な線ではないか」というように、やはり思われます。では、一体どうなったのでしょうか？まず推理していただいてから図2を見てください。

【将軍吉宗の新規製造物禁止令】

図2のグラフをみると、相馬藩の年貢収納量は、1721年からは、1715年の17.6万俵には達することなく、そのあと増減を繰り返しながらも、確実に急テンポで落ち込んでいます。1782年の年貢収納量は9万7千俵で、1715年の17万6千俵の半分近くにまで落ち込んでいます。相馬藩の年貢収納量は1720年頃まで着実に増大し続けていたというのに、これはまたなんという変わりようでしょうか。この藩の1715年前後の年貢収納量の増大率と減少率を計算してみると、1715年まで毎年平均して970俵ほどずつ(複利計算では年率0.67%)増大していましたが、1715年以降は毎年平均1180俵ほどずつ(年率0.89%)減少しています。つまり、1715年より前の年貢収納量の増大テンポよりも、それ以後の減少テンポの方が激しく、ふつう、増大期と減少期の間には停滞期といったものが見られるものですが、相馬藩の年貢収納量の場合、停滞期らしいものも認め難い状況です。

「江戸時代の前半と後半とは時代が違うほどに違う」と板倉先生は主張されており、その「前半・後半」というものではなく、その転換点は、明確に1720年前後とはっきりしており、まるで革命でも起きたかのごとくとのことでした。

ところが、1720年という年は、元号でいうと享保5年のことで、徳川吉宗が八代将軍となっていわれる「享保改革」をはじめて5年目のことであり、その年の前後には、革命や政変のようなものは起きておらず、その他の政治的大事件もなく、1716年の吉宗政権の誕生がその転機になっていると見るよりほかないわけです。

それなら、吉宗政権は、経済の基本に関わるどんな政策を実施したのでしょうか？ふつうの歴史の本をみる限りでは、吉宗は江戸時代の経済を停滞させた張本人として描かれていることはなく、『(角川・第二版)日本史辞典』で「徳川吉宗」の項を引くと、「武芸・学問、特に実学の奨励、貨幣改鑄、法令の編纂、殖産興業、新田開発の推進など幕政全般にわたる改革を行い、ある程度幕府の支配体制の補強に成功」とあって、「経済を発展させた」と取れる記述のみが目立つわけです。

そこで板倉先生は、「吉宗政権は1720年ごろに、経済の発展ないし衰退を抑えるためにどんな政策をとったか」を見るため、吉宗の言動を記録した『徳川実紀』を調べられたところ、なんと吉宗は「何事によらず、新規のものを工夫・製造することを禁止する」と指示していたのです。

【新規製造物禁止令のインパクト】

吉宗がそのようなことを最初に指示したのは、1720(享保5)年5月12日のことであり、『徳川実紀』のその日の項には、「今日、寺社奉行・町奉行・勘定奉行・勘定吟味役の輩に仰せ下さるは」とあって、その中で、「いま世上に売り買うよろずの品物、何一つ備わらぬこともなきに、なお多く造りださば、人びと身のほどに越えて買い求むようになり、自ずから家資窮乏し、ついには国の衰えとなるべければ、米穀・薬物のほか衣服・調度のたぐい、こと新しく製し出すはいうまでもなく、たとひ有り来れるとも、物数増益する(増し加える)ことなきようにすべし」と指示しているのです。

つまり、<本も器材も衣類も菓子も、酒も神社も仏像も何もかも、新しいものを工夫製造すること、まかりならぬ>ということです。こんなお触れが出たら、人々の創造性が破壊され、経済も完全に停滞してしまうに違いありません。これは創造を仕事とする「理系」の人々には特に気になる政策であり、五代将軍・綱吉の「生類憐みの令」は悪法として有名ですが、この吉宗の「新規製造物禁止令」と比べるとまだまだしで、江戸時代は、この吉宗の「新規製造物禁止令」によって完全に停滞社会とされるようになったと板倉先生は分析されています。

少なくとも1720年以前には農機具の発明も活発だったのですが、吉宗は、「発明や創造はやめよ」と命令したわけです。農機具の類は、例外とされた「米穀・薬物」関連事項としてその新規考案も認められていたのか、それとも、新しく製造し出

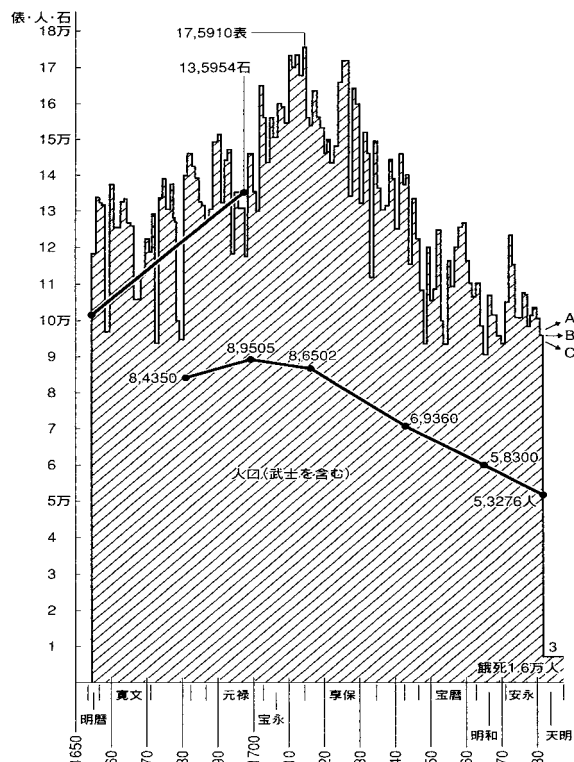


図2. 相馬藩の江戸時代中頃の収穫・年貢・人口等の状況

すのを禁じられたのかははっきりしないとのことですが、「新規製造物禁止令」の思想は、そういうものの発明考案を抑える効果をもったことは間違いないと推察されています。

吉宗は、これまで通りの経済成長を維持・発展させるよりは「何とか現状維持を図ろう」と懸命になったに違いなく、それがく何事によらず従来なかったものを作り出すことを禁止する>という<新規製造物禁止令>に繋がったわけですが、江戸時代の経済はその後ほぼ完全に停滞してしまいました。というよりも、「1720年の水準でとまれ!」ということではできずに、相馬藩の人口はその後激減し、それに応じて年貢収納量も激減したのです。

【二宮尊徳の農村復興計画の科学性】

この後はどうなったのか、それも皆さんの関心事であろうと思います。図3に示すように、天明の大飢饉や天保の大飢饉といった大変な時期を経て、二宮尊徳が相馬藩の農村再建事業を担当するようになります。彼の優れたところは、まず藩の経済資料の提出を要求し、藩が足掛け4年もの年月を費やして年貢収納量等をまとめた資料を検討し、「経済の問題を解決するにはまずそういう統計資料が欠かせない」という論理的手法を駆使して、再建していったそうです。そして結局、相馬藩の年貢収納量はその後、上向きに転ずることになり、二宮尊徳の示した目標ラインからは下回っているようですが、それでも成長を続け、1870(明治3)年、明治政府の廃藩置県の政策によってこの藩が廃止される前の年には、ついに念願の目標ラインにまで達したそうです。

【NECAでも創造に挑戦し続けよう】

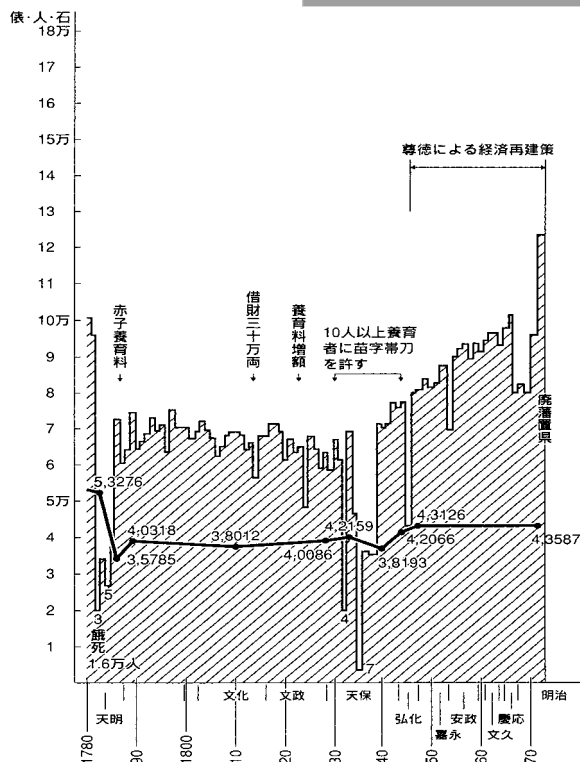


図3. 相馬藩の江戸時代後半の収穫・年貢・人口等の状況

ここでは、二宮尊徳のエピソードを紹介することが主題ではなく、「新しいことに挑戦しない、創造しないで現状維持でよいと思った途端、現状維持すらできずに衰退する」という、1720年以降の歴史を教訓として学びたいと思います。

日本電気制御機器工業会(NECA)は、多くの熱心な会員企業に恵まれ、グローバル競争の荒波の中でも協調して活動を推進しています。幸い制御技術という360度方向、いかなる産業においても必要不可欠な技術を有し、幅広いアプリケーション適応性をも備え、明確な事業ビジョンのもと、3Sとして国際標準化(Standardization)、安全・安心(Safety)、そして環境対応(Sustainable Society)を力強く推進しています。これからのスマートコミュニティ構築にも様々な制御技術が不可欠であり、まさにこれからがNECAの本領発揮の時代になるのではないかと感じております。そして、それはNECAとしての今後の進み方にかかっていると考えています。歴史に学び、「もうこのままでよい。現状維持でよい。」と考えるのではなく、益々の創造に向け、会員企業一丸となって挑戦し続けていきたいと思います。

特に、今年は5月21日の早朝に金環日食を本当に美しく観ることができ、自然の雄大さに大変感動したのですが、金環日食の年は、「豊作」であるとの言い伝えがあると聞きました。理系の視点からの話の最後に、非科学的な言い伝えを書いておかしいかもしれませんが、江戸時代前半の相馬藩の躍進のように、わがNECA藩の藩士も色々な創造に頑張って挑戦することでNECA藩が益々「豊作」であることを祈念し、そしてNECAが新しい山々を開拓し、「登山」を継続することでより一層発展することも祈念して、筆を置くことに致します。

藤田 俊弘：IDEC株式会社(常務執行役員)

参考図書：板倉聖宣著「日本史再発見：理系の視点から」朝日新聞社